

肉用牛(黒毛和種)の早期離乳について

横田 修・図師 隆一・岩下 忠

(宮崎県総合農業試験場肉畜支場)

YOKOTA, O., ZUSHI, R. and IWASHITA, T.

Effects of early weaning on body weight gains of beef calves and reproductive performance of dams

母牛の体力消耗を軽減し、生産回転を早めるとともに、子牛育成技術改善の1方法として早期離乳を行ない、これが母子に及ぼす影響について調査した。

I. 試験方法

供試牛は42, 43年度ともに黒毛和種母子(子牛は生後1カ月で42年は雄, 43年は雌)で、区は両年とも早期離乳区(生後3ヶ月離乳)、慣行区(生後6ヶ月離乳)とし、1区当母子3組の群飼とした。

子牛の生後6ヶ月までの濃厚飼料給与は第1表のとおりである。粗飼料は飽食程度とした。雄は去勢(4ヶ月令)し、18ヶ月令まで肥育、雌も18ヶ月令まで育成して、両区の発育について比較調査した。

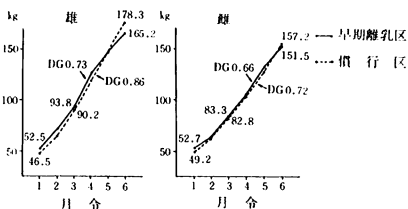
母牛は両区とも濃厚飼料、粗飼料を同量給与とした。また、母子とも夏~秋は放牧した。

第1表 子牛の濃厚飼料給与(1日1頭当kg)

年	区	1~2ヶ月令	3ヶ月令	4ヶ月令	5ヶ月令	※中畜の肉用牛の子牛別飼餌基準。
42	早期離乳区	人工乳	1.8	1.6	1.8	
	慣行区		1.0	1.2	1.5	
43	早期離乳区	自由採食	体重の2%			
	慣行区		0.9	1.1	1.3	

II. 試験成績

子牛の生後6ヶ月までの体重増加は第1図のとおりである。雄、雌ともにや、慣行区が早期離乳区よりもすぐれた成績を示したが、差は認められなかった。これを第1回全国和牛産肉能力共進会の発育範囲と比較すると、雄は下限、雌は平均程度の発育で



第1図 子牛の体重増加(1頭平均)

あり、両区とも正常な発育を示した。また、この期間(153日間)の1頭当飼料費(放牧で採食した牧草は除く)は、42年度は早期離乳区が9,169円、慣行区が6,670円、43年度は早期離乳区が8,196円、慣行区が4,527円でいずれも早期離乳区が多く要した。

雄の肥育は生後18ヶ月の終了時体重が早期離乳区が449.2kg(DG0.73)、慣行区が472.2kg(DG0.75)でや、慣行区が優れた成績であったが、同程度の増体であり、と体成績についても差は認められなかった。雌の育成は生後18ヶ月で早期離乳区が336.2kg、慣行区310.6kgでや、早期離乳区が優れた成績であった。

母牛の分娩後の受胎は第2表のとおり、両年とも早期離乳区が慣行区よりも早く受胎したが、哺乳中に受胎した牛もあり、この結果が早期離乳によるものとは確認できなかった。また、分娩後3ヶ月から6ヶ月の体重変化は両年とも増加の傾向がみられたが、いずれも早期離乳区が慣行区よりも、や、すぐれた。このことからみれば、泌乳が母牛にとって負担になると思われる傾向がみられた。

第2表 母牛の分娩後の受胎日数と体重変化(1頭平均)

年	区	受胎日数	授精回数	分娩後の体重変化(kg)		
				3ヶ月	6ヶ月	差
42	早期離乳区	99日	1.7回	349.8	412.3	62.5
	慣行区	120	2.0	374.5	422.7	48.2
43	早期離乳区	79	2.0	374.1	436.2	62.1
	慣行区	230	3.3	352.3	413.0	60.7

III. 要約

生後3ヶ月の早期に離乳しても濃厚飼料を体重の2%程度給与することにより、子牛の発育は慣行離乳のものと同程度の発育をすることが認められ、子牛の発育にとって支障は認められなかった。

母牛の分娩後の受胎に及ぼす早期離乳の効果は確認できなかったが、分娩後の体重変化において、哺乳が負担になると思われる傾向がみられた。